

(注2) 『足で見た筑豊 朝鮮人炭坑労働の記録』 金光烈 (明石書店)

(注3) ボタとは掘った石炭と一緒に出てくる岩石屑。

(注4) 「Hanada」 平成二十九年一一月号「微用」は不幸だったのか①軍艦島」 鄭大均より

(注5) 平成二九年一二月四日付産経新聞「美しき動き国へ」 櫻井よしこより

(注6) 『軍艦島に耳を澄ませば』 一七四ページ

(注7) 『正論』 平成二九年九月号「世界遺産『軍艦島』を韓国映画の捏造から守ろう」 杉田水脈より

(注8) (注9) (注10) 平成二九年二月八日付産経新聞「『歴史戦』軍艦島を歩く 憤る島民「嘘暴く」 「アウシユビツトは違う」」 より

(注11) 平成二九年二月二四日付産経新聞「『歴史戦』軍艦島旧島民らの証言動画公開 「地獄島じやない」」 反論より

(注12) 中央協和会：全国各地に存在していた行政レベル、民間レベルでの内地在住朝鮮人に対する援助、互助団体を昭和一四（一九三九）年に「地方共和会」として統合再編制し、その現役幹部によって中央協和会が作られ、厚生省・内務省の外郭団体となつた。

(注13) 『歴史通』 平成二九年四月号「韓国『日帝強制動員歴史館』の嘘八百」 三輪宗弘より

第七章 「軍艦島から脱走」の真実

いろいろな人々が混在していた「軍艦島」

『筑豊・軍艦島』には「(朝鮮人労働者は) 奴隸的な労働に耐えられず、最後の手段として島からの逃走を試みた」と書かれています。

では脱走者の実態はどうだったのでしょうか。それを明らかにするには、当時端島にはどのような人々が働きにきていたのかを知つておく必要があります。

明治時代に「納屋制度」という炭鉱で働く人を集めための制度ができました。これは納屋頭が坑夫を募集し、納屋に住まわせて食事を与え、作業の監督をするものです。

ところが、納屋頭が地方の博徒などに人集めを依頼した結果、誘拐同様の手口で坑夫がかき集められる事態が起きました。彼等は各地の炭鉱で過酷な労働を強いられ、怠けると棍棒で殴られました（注1）。

納屋頭が坑夫の給料を「ピンハネする」とも日常茶飯事であり、また、会社の生産計画に比べ

て不必要に多い人数を送り込むこともあって「納屋制度」はやがて見直されることとなり、高島炭鉱や端島炭鉱では明治三〇年の時点で廃止されています。

しかし下請けの制度そのものが全くなくなることはなく、飯場の親方が労務者を引き連れてやつてきて会社と契約し、親方自身は会社が供給する寮の「寮長」として君臨することがありました。親方の中には朝鮮人もいて、朝鮮人労務者を使つていました。こうした経緯で端島炭鉱で働いていた人たちをまず第一グループとします。

次に、炭鉱で働くことを望む人たちが自らやつてきたり、あるいは斡旋業者の紹介で会社と直接契約するケースがあります。家族連れも多く、その大部分が会社の社宅に住んでいました。朝鮮半島から出稼ぎにきている人もたくさんおり、彼らは島を自由に出ることができたそうです。^(注2)これが第二グループです。

さらに、朝鮮半島などの外地から会社が集団で雇い入れた人たちがいます。彼らは後に述べます「自由募集」「官斡旋」さらに「徴用」などの制度でやつてきた人たちです。彼らを第三グループとしましょう。

第三グループのうち「自由募集」や「官斡旋」で就職した人々は第二グループとほとんど同じ条件で生活していましたが、「徴用」で来た人々は彼らの中のリーダーが「隊長」となつて寮生活を送りました^(注3)。彼らが島を出る時は、親が危篤になつたり死亡したなどの特別の

理由と許可が必要でした。端島には一部中国人もいましたがこれは「徴用」に準じた待遇だったようです。

そして三菱の正社員がいましたが、彼らは転入転出が多く、あまり長くは滞在していませんでした。彼らを第四グループとします。

徴用工の脱走はあつたのか

では脱走があるとすればどのグループでしょう。第二グループや第四グループは島を出る自由があるため脱走の必要はありません。一番ありうるのは第一グループです。

親方がインチキ賭博や女郎買いをさせて労務者に借金を作らせ、二年契約や三年契約で給料をピンハネし、さらに借金を作らせてどこまでも縛りつけるというケースがあつたようです。炭鉱労働は楽ではなく、金も入らなければ奴隸と同じことになり、命がけで逃げ出した人々もいたに違いありません。そして捕まれば親方からこつびどく叩かれることもあつたでしょう。しかしこれは会社側の管理不徹底ということはあつても、会社が被害者に対して直接責任を負う筋合いのものではありません。

第三グループの中では「自由募集」や「官斡旋」は第二グループと同じ待遇ですから逃亡は

まず考えられません。では「徵用」の場合はどうでしょうか。

『軍艦島に耳を澄ませば』には、過酷な強制労働に耐えかねて多くの朝鮮人が海に飛び込み死亡したとあります。

この本によると、端島の対岸にある野母崎半島にある「南越名海難者無縁仏之碑」を発掘したところ、「四体の遺体」が出てきたそうです。そこで「炭鉱会社が朝鮮人であることを確認した上で、『身元不明』ひいては『無縁仏』として処置（埋葬）したのではないかかと思われる」という推測によつて「朝鮮人漂着死体埋葬の事実が証明された」と結論づけています。ところが役所の人は「もし軍艦島から逃げてきた朝鮮人だつたら、身元確認のために島に戻されたあと荼毘にふされているはずなのでありえない」とこれをきつぱり否定しています^{注4)}。『軍艦島に耳を澄ませば』の中にも、端島の中央部にあつた泉福寺の住職の次のよつた証言があります。

「朝鮮人は見ましたが、話すこともなく埋葬したこともなく、別に覚えていることはありません。逃げようとして海に飛び込んで亡くなつた話も聞きましたよ」

さらに同書に登場する浜口三郎という高島（端島の隣の島）の炭鉱で働いていた人物も「（高

島では）朝鮮人がそういう風に脱走して、なんしたちゅうのは聞いたことがないですね」と証言しています。

後でも触れますか、当時日本では朝鮮人の親方が取り仕切る飯場が全国至るところにあり、日本語ができなくても、そこならもぐりこむのは簡単でした。朝鮮人の飯場を渡り歩いて、大金を稼ぐ朝鮮人労働者もいました。そのような話ばかりが伝わつてくると、外部の飯場で楽にたくさん稼ぐために、逃げ出そうと考えた徵用工がいたかもしれません。あるいは、隊長や周りからのいじめに耐えきれず、脱走しようと思った者もあつたでしょう。

しかしながら、実際にそれを実行に移して死亡したものが「朝鮮人徵用工」の中にいたかどうかは、実は極めてあいまいなのです。

脱走を監視する体制はなかつた

映画『軍艦島』では端島に監視塔があり、朝鮮人脱走者を発見すると銃で殺害しています。『筑豊・軍艦島』に登場する元朝鮮人抗夫だったという人物は、「島抜けに成功した話はまず聞いたことがない。捕まれば労務係から拷問を受け、死体は海に投げ込まれるだけだ」「炭鉱側の坑夫の島抜け対策は徹底していた。端島の周辺にモーターボートを走らせ、空襲のない夜間

はサーチライトで堤防を照射した」と証言しています。

しかし、死体を海に投げ込めば、どこかに流れ着いて「殺人事件」として捜査が始まるはずです。さらに監視塔を作りモーター・ボートまで走らせて、厳しく島抜け対策を徹底していたというのであれば、『軍艦島に耳を澄ませば』に出てくる朝鮮人労働者のこの証言は、どう解釈すべきなのでしょう。

「八月九日はわたしは海で泳いでいたんですよ。仕事が明けだつたんでね」

監視員は、海で遊泳している者と脱走しようとするとどう見分けたのでしょうか。

そもそも監視塔などありませんでした。筆者も実際に端島を視察しましたが、監視塔などを建てるほどの余分な土地はありません。韓国側の証言にたびたび出てくる「監視塔」なるものは、堅抗の真上に建っていた「堅抗櫓」の写真を「監視塔」と誤認した可能性があります。端島にはいくつもこの「堅抗櫓」があり、一番高いものは四七メートルもありました。

端島は監獄ではなく、朝鮮出身者を管理していたのは同じ朝鮮出身者でした。朝鮮人労働者の逃亡を日本人が監視する体制など、もともとなかったのです。

因みに『軍艦島——恥ずかしい世界文化遺産』には、少年たちが鉄格子の檻に入れられてい

る様子が描かれていますが、筆者が元島民の方から直接聞いたところ、「そんなことは全くありません。そんな残酷なことがどうしてできますか。端島には派出所に二人ほどが入れる留置所はありましたが、せいぜい酔っ払いを収容するくらいでした」との回答でした。

軍艦島は銃とは無縁だった

『筑豊・軍艦島』には、「逃亡者を監視するために、在郷軍人会の会員たちが銃をもつて警備していたという」という記述があります。また『軍艦島——恥ずかしい世界文化遺産』では、「逃亡して捕まれば銃殺にされた」とあります。

では逃亡者を監視したり、捕まえた者を「銃殺」するための「銃」はあったのでしょうか。筆者が聞いた元島民の方の証言によれば、端島には当時警官が二名駐在していました。それも昔の警察官は丸腰ですから、銃など持つていません。もちろん、軍の部隊が端島にいるはずがありません。端島に軍隊を置く必要性など、治安上も防衛上も全くなかつたからです。映画『軍艦島』では、朝鮮半島出身者が端島から脱出するために戸日本兵と銃撃戦を繰り広げていますが、これは『筑豊・軍艦島』にある次の証言にヒントを得たのかもしれません。

採炭中に日本人指導員から暴行を受けたため中国人一人がスコップで反撃して大怪我をさせる事件があつた。中国人だけが責任を問われて労務事務所に連行されて酷く殴られた。これが原因で暴動が起き、全員が入坑を拒否した。炭鉱側は長崎県に対して軍隊出動を要請した。（中略）端島炭鉱の暴動鎮圧に出動した大村連隊との間で激しい戦闘となつたという。

しかし労使間の争議であれば軍隊ではなく警察を呼ぶはずです。また仮に軍隊との間でそのような「戦闘」がおこつたのであれば、必ず人々の記憶に残っているでしょう。しかしそのような証言はどこにもありません。記録も全くありません。端島は銃とは縁のない平和な島だつたのです。そこでどうして「銃撃戦」や「銃殺」などがあるでしょうか。

因みに、映画『軍艦島』には端島がアメリカの爆撃機によつて爆撃され、日本人だけが防空壕に避難して、締め出された朝鮮人は次々に火だるまになつて死んでゆく場面がありますが、著者が元島民の方から聞いたところ、端島は一回もアメリカ軍機によつて爆撃されたことがありません。一度だけ石炭運搬船が魚雷攻撃を受けたことはありますが、島民に被害は出ていません。終戦間際に、隣の高島の二子発電所が爆撃されて端島への送電がストップしたことがあり、映画はこれをヒントにした可能性がありますが、歴史の捏造に変わりはないでしょう。

(注1)『Hanada』平成二九年一一月号「徴用工は不幸だったのか①軍艦島」鄭大均より

(注2)『軍艦島に耳を澄ませば』四五ページ

(注3)当時徴用者は「隊組織」となつており、朝鮮人徴用工の中のリーダーを「隊長」と呼称した。

(注4)『JAPANISM』二〇一六年vol.32「軍艦島を反日のプロパガンダにするな」小川茂樹より

第八章 朝鮮人への差別はなかつた

『筑豊・軍艦島』には、「労務係は朝鮮人を人間扱いしなかつた。朝鮮人は世の中で一番下等であると考えて命令ばかりして怒鳴つていた」という元朝鮮人労働者の証言があります。

また『軍艦島に耳を澄ませば』には「当時朝鮮人たちは日本人から『犬、ねこ、ぶた、チヤンコロ（中国人）チヨウセンジン』と蔑称され（人間並み）の扱いをされていなかつた」という記述もあります。果たして端島では、それほど朝鮮半島出身者が差別されていたのでしょうか。

日本と朝鮮の子供たちは一緒に学んでいた

映画『軍艦島』では小学生と見られる女の子に慰安婦にするための性病検査を受けさせ、絵本『軍艦島——恥ずかしい世界文化遺産』では二歳の少年たちを牢屋に収容し、坑内作業にこき使つたように描写しています。しかし実際には日本人の子供も朝鮮人の子供も、仲良く一緒に学校で学んでいました。

医者である父親に連れられて九歳の時に端島に移住した内田好之氏は、著書『燃ゆる孤島』（フクラン）の中でこう回想しています。

端島小学校に転向してきた昭和一六年八月、クラスの中に、一番目立つて体格が大きい同級生¹⁾が二人いた。風貌もかなり違つて見えた。その二人の名前は郭山君と金君。国籍（ママ）は朝鮮である。金君は日本名で巖谷君というが、私は金君と呼んでいる。

この二人は、先生や同級生に色々と面倒をかけていた。この二人のせいでクラス全員が罰を受けたことも度々あつた。つまり全体責任ということである。

金君はよく頭の髪の毛を五・六センチ伸ばし、先生から赤い布で頭の毛にリボンのようく結ばれ、照れ笑いをしていたのが今も印象に残つている。彼とは特別、親しくはなかつたが、何となく馬が合う感じだつた。

当時日本人と一緒に端島の小学校で学んだある韓国人は、自著の中でこう回想しています（注）。

鉱夫の子供たちは学校に通うことができた（中略）学校生活は悪くなかった。朝鮮で

日本語を習つてきていたのに加え、頭のよかつたグ・ヨンチヨルは日本の子供たちを差し置いて最高の成績を維持することができた。性格もおだやかで冗談もよくいうし、運動もできたので日本の子供たちにもよく溶け込んでいた。

また筆者自身も現地調査を行った際に、戦前小学生だった元島民の方から次のようについて聞いています。

「仲の良い友達に朝鮮人の子供がいました。初めて遊びに行つたときはキムチくさかつたけれどすぐに慣れて、その後はしょっちゅう遊びに行つてました」

これらの証言からも、日本人の子供と朝鮮人の子供が仲良くしていた当時の様子がありありと目に浮かんできます。彼らは普通に楽しい学校生活を送つていたのです。

日韓併合時代は、朝鮮の人々も「日本国民」であり、日本の法律で守られていました。幼い子に強制労働をさせたり、売春をさせるなど許されるはずがありません。すぐに警官が飛んできて、実行犯は逮捕されて牢屋行きとなります。

この映画や本のストーリーを考えた人物は、これだけのことによく思いつくものです。その

逞しい想像力を、もう少しまともな方向に使えば大成できるのかもしれません。

日本人も朝鮮人も同じものを食べた

『軍艦島に耳を澄ませば』の中で、「一四歳で軍艦島に連行された」と主張している元朝鮮人労働者は「こんな重労働に、食事は豆カス八〇%、玄米二〇%のめしと、イワシを丸だきにして潰したもののがおかげで、私は毎日のように下痢して、激しく衰弱した」と証言しています。

これについては前出の「眞実の歴史を追求する端島島民の会」会長加地英夫氏が『私の軍艦島記』の中で次のように回想しています。

昭和一九（一九四四）年、六年生になりました。戦況はますます日本に不利となつて、食事情はさらに悪くなり、いろいろな物資も欠乏し、配給も麦、雑穀、イモ、豆カスになりました。

確かに日本側が提供した食事に彼らは満足できなかつたかもしれません。しかし当時は戦時中で日本中食糧難でした。日本人も同じだったのです。

『軍艦島に耳を澄ませば』には「食事は『豆かす』『押し麦』がほとんどでいつもひもじい思いをしましたが、四年間の間になれてしましました」という元朝鮮人労働者の証言や、「日本人が持ち込んだ豆を密かに買って腹の足しにした」という話も出でています。

みんなが同じようにひもじい思いをしており、日本人と朝鮮人の間に食糧配分に関する差別などなかつたことは、元島民の証言からも明らかです。

住居にも差別はなかつた

映画『軍艦島』で描かれている朝鮮人労働者の住居は、半地下で床を踏めば污水が染み出す劣悪な部屋になつています。また『軍艦島に耳を澄ませば』には「九階建てのコンクリートアパートの中で、日光が当たらず換気も悪い半地下一階が朝鮮人の部屋だった」という証言もあります。

しかし、端島の住居はどこも十分な防潮対策がなされており、日本最古のコンクリートアパートである三〇号棟も、回字型で建設され、居室の入り口や階段を、全て内側に設けて潮が入り込まないようになっています。また廊下の要所には波浪の侵入を防ぐために厚い防潮扉が設置されていました。

なお、大正七（一九一八）年に建設された一部の建物には、一階部分を島内に流れ込んだ海水の「はけ階」にするという防潮対策がなされており^{注2)}、映画では日本人の残虐性を際立たせるために、この人の住めない「はけ階」に徴用工たちが「住ませられた」ことにしているのかもしれません。とはいえ徴用工は大事な戦力ですから、風邪を引かせるような部屋に会社が住まわせるはずがないことは誰が考えても分かりります。

端島炭鉱の場合、業者として島で仕事をした者以外は、三菱の職員や鉱員とその家族及び下請けとして働いていたものまで、部屋代や光熱費、水道代等の心配をする必要はほとんどありませんでした。元鉱員夫人はこのように当時を懐かしんでいます^{注3)}。

「当時家賃は二円でした。電気代や水道代は何もいらなかつたです。ガスはプロパンガスの引換券を一軒に何枚か無料で配つてました。それ以上必要な時は買つてました」

さらに勤続年数が長いものほど条件のいい部屋に入居できたそうです。勤続年数によつて点数が加算され、その点数によつてより条件のいい部屋に移ることができました^{注4)}。

それは日本人でも朝鮮人でも同じことで、『筑豊・軍艦島』には次のような記述があります。

姜夫妻は端島で新婚生活を始めようとしたが、入居待ちの朝鮮人夫婦が一組あつてなかなかアパートに入られなかつた。やむなく夫の知り合いのアパートに同居することになつた。（中略）まもなくアパートの一室が空くと姜たちは七階へ移つた。

日本人も朝鮮人も同じアパートの中で混在しており、住居差別などなかつたことが明らかです。

賃金上の差別もなかつた

『軍艦島に耳を澄ませば』には「賃金をもらつたことがない、私の記憶は確かだ」あるいは「酒屋にも食堂にも行けなかつた。給料をくれなかつたから」という証言があります。しかしその一方で、「賃金は六〇円から九〇円です。だんだん熟練工になつてきたので賃金も上りました。仕送りもしていきました。届いていました」という人もいます。証言にばらつきがあるのはなぜでしょうか。

ではまず法律上ではどうなつていたかを確認しましょう。

昭和一九（一九四四）年二月一八日発令の勅令第八九号第一八条には、次のように規定され

ています（これは同年に朝鮮半島にも適用されています）。

被徴用者一対スル給与ハ其ノ者ノ技能程度、従事スル業務及場所等ニ応ジ且つ従前ノ給与其ノ他之ニ準ズベキ収入ヲ斟酌シテ被徴用者ヲ使用スル官衛又ハ事業主之ヲ支給スルモノトス

国としては「従前の給与その他に準すべき収入」を斟酌して支給すると定めています。但し、これは「最低基準」であり、実際問題として日本の鉱山会社には民族差別の賃金体系がなく、朝鮮半島から来た労働者にも日本人と同じ基準で給与を支払つていました。

当時、端島炭鉱の外勤課に勤めていた日本人も『軍艦島に耳を澄ませば』の中で「朝鮮人は日本人と同じ賃金を払うたし、自由にさせよつた」と証言しています。なお、賃金差別がなかつたことについては後でも詳しく触れております（一九二ページ参照）。さらに端島炭鉱では、他の鉱山と比べ高賃金が支払われていたようです。軍艦島デジタルミュージアムの係員はこう話しています（注5）。

「韓国人の方は徴用で連れてこられたと言っています。たしかにそのような方もいらっしゃ

しゃつたのですが、ほんとどが『条件がいいから』と他の炭鉱から移つてこられた方でした」

昭和一七年一月一七日付長崎日日新聞社の報道によれば、端島炭鉱で働く人の平均月収一五〇円とあり、端島で少年期を過ごしたある韓国人も本の中では次のように書いています（注6）。

熟練労働者だった父の月給は戦時中物価が上昇したときは一八〇円にも達した。教師や役所の職員よりも多い月収だった。しかもお金を使おうとしても、使うところのない孤立した島だったので、一定額の貯金をすることができた。

端島で働いた朝鮮人労働者は、朝鮮半島にいた時よりはるかにたくさん稼いでいたようです。ならば「給料をもらつたことがない」という証言が出てくるのが不思議ですが、少なくとも所帯持ちについては「必ず給料日には並んで判をもつてもらいに来てた」と元島民が証言しています（注7）。単身者の場合、寮の責任者がまとめて受け取り、寮で各自に渡していましたので、その辺で何らかのトラブルがあつたと考えるのが妥当でしょう。

朝鮮人用の遊郭があつた

端島には朝鮮半島出身者用の遊郭もありました。端島の遊郭の事情については黒沢永紀著『軍艦島 奇跡の産業遺産』（実業之日本社）に記載してありますので、その部分を引用してみます。

遊郭は全部で三軒あり、そのうちの二軒が日本人用の「本田」と「森本」、そしてもう一軒が朝鮮人用の「吉田」でした。（中略）昭和八（一九三三）年一月の長崎新聞に遊郭「本田」を伝える記事が掲載されています。

「県会議員本田伊勢松氏の經營する料亭本田屋が多情多彩の情緒を持つて炭粉に塗れた坑夫たちの荒くれた心身を愛撫してくれるのも炭坑端島のもつ柔らかな一面面である」

この一文からは、黒沢氏も指摘している通り、当時の遊郭が炭鉱にとつてどのような存在で、軍艦島がどういう島だったか、さらには当時の社会情勢など、様々なことが読み取れると思います。

片や遊郭「吉田」は、働く遊女もまた朝鮮人の女性で、戦後も営業を続けていたと言

います。（中略）少なくとも「吉田」の従業員は日本人と親しくし、その子供たちもまた軍艦島にいた日本人の子供たちと仲良く遊んでいたと聞いています。

朝鮮人専用の遊郭は映画『軍艦島』にも出てきますが、当時の遊女は親目的だったようです。いずれにせよ、朝鮮人向け遊郭が繁盛したということは、朝鮮人労働者がよい賃金をもらつていた証拠ではないでしょうか。

中国人に感謝された医師

閉山三〇年を記念して高島町が発行した『端島（軍艦島）』という冊子があります。そこには、次のような言葉が記されています。

「ご安全に」は坑内の挨拶です。坑道の真っ暗闇の中、キャップランプの明かりで浮かび上がる誰とでも、会えば「ご安全に」の挨拶です。坑内ではこれ以外の挨拶はありません。坑内では一人の不注意でも直ちに全員の生命にかかるのです。そうした連帯意識と常に安全を心がけることが「ご安全に」の挨拶に込められています。炭坑は地下産業という大変厳しい労働条件下にあります。坑内では緊張の連続です。しかし、職場を離れれば「ヤマの男」たちは、全員が家族同様の付き合いで、共同体意識が強く、端島は一島一家と呼ばれてきました。

これが戦前戦後を通じた端島の姿でした。この島の人たちがどうして朝鮮人や中国人を虐待するでしょうか。

前出の内田好之氏は著書『燃ゆる孤島』の中で、ある中国人労働者のことについて語っています。その人はある日彼のところへ訪ねてきて片言の日本語でこう言つたそうです。

「私は中国人です。ひと月ほど前に坑内で仕事中に足に怪我をしてしまいました。その治療を内田先生にしてもらいました。中国人の私に先生は日本人と変わらない話し方や態度で接して頂き、島にきて初めて親切にしてもらい嬉しかったです」

そして手に持つてきた新聞紙に包んだ一個のパンを彼に渡し、深々と頭を下げて帰っていました。夕方になつて内田氏の父が病院から帰ってきたので、そのことを話すと、彼の父はこのように答えたそうです。

「患者の中には朝鮮人、中国人は何人かはいるが、日本人と区別して治療したことは一度もないし、寧ろ国を離れてはるばる日本まできているのだからと、無意識のうちに親切にしているかも知れない」

全員が一心同体となつて仕事をする「ヤマの男」たちはもちろんのこと、彼らを支える医師も看護婦も朝鮮人や中国人に分け隔てなく対応していました。

『軍艦島に耳を澄ませば』には「せっかく治療を受けても朝鮮人の場合は、充分な手当を受けられず『放置同様』に処置されたものも多かつたものと想像できる」と推測で書いていますが、内田氏のこのような証言も是非取り上げてもらいたいと思います。

手を振つて別れを惜しんだ両民族

そして昭和二〇（一九四五）年八月一五日、終戦を迎えて朝鮮人労働者は帰国することになりました。

「端島島民の会」のメンバーによれば一〇月に三菱の船で彼らを半島まで送り届けたそうです

（注8）。その時の別れの様子を、筆者が端島を視察した折に元島民の方がこのように語つてくれました。

「日本人も朝鮮人も別れを惜しました。彼らが船に乗つて端島を離れる時は、日本人全員が岸壁に集まつて手を振り、彼らもまた見えなくなるまで手を振り続けました」

前出の『石炭史年表』には、端島の北方に位置する大島（長崎県西海市）にあつた大島炭鉱（松島炭鉱大島事業所）での朝鮮人労働者の帰国時の模様について次のような記述があります。

政府の指示を待たず、「戦時中、大島の生産を支えた朝鮮人労働者九〇〇人」の送還を検討、朝鮮人指導員の協力を得て一〇月から一月にかけて円滑に行つた。会社は、精算した賃金の他、米・味噌等の生活用品を各人に支給し、船を用意した。朝鮮人労働者は惜別の言葉を交わしながら、夜静かに大島を去つていった。

朝鮮人労働者の帰国時には、互いに別れを惜しむ光景がいたるところで、あつたようです。

「端島島民の会」の会長は当時を振り返つてこのように話しています（注9）。

「映画で描かれる奴隸労働などあるはずがない。炭坑では古株の朝鮮人が新米の日本人を指導することもあり、終戦後『端島の方が給料も良い』と島に戻ってきた朝鮮人もいました。狭い島内で朝鮮人への虐待や殺人が起こればすぐに耳に入るはずですが、そのようなことは一切ありません。端島には一〇〇世帯ほどの朝鮮人家族が暮らしており、子供たちは学校で机を並べ、仲良く過ごしていました」

この言葉の中に端島の真実が凝縮しているのではないでしょうか。

映画『軍艦島』はレイシヤル・ハラスメントの極致

差別どころか、端島の人々と朝鮮半島の人々はこれほど心が繋がっていたのです。

映画『軍艦島』では銃撃戦で脱出したように描かれていますが、これがどれだけ元島民の気持ちを傷つけているかを、柳昇完監督に是非理解してもらいたいと思います。

ソウル在住産経新聞客員論説委員の黒田勝弘氏によれば、二〇一八年一月に韓国のアシアナ航空機を使って一時帰国した時に、『軍艦島』が機内映画で上映されていたそうです。他にも、

関東大震災での朝鮮人虐殺を描いた『朴烈』、慰安婦問題がテーマの『アイ・キャン・スピーキーク』といった反日映画もメニューにあつたといいます。日本人を「鬼畜扱い」するこれらの映画を、平気で日本便で上映する神経が分かりません。韓国で日本人観光客が激減するのは当たり前でしょう。

以前、筆者が羽田からソウル行大韓航空に乗ったときは、飛行機の位置を示す画面にわざわざ竹島を表示し、「D o k d o（独島）」と書いてありました。これは日本人への当てつけにしかれません。

韓国人の人々は自分たちを「情の民族」と言いますが、それなら日本人にも「感情」があることを知るべきです。映画を作ることは勝手ですが、事実を歪曲してはいけません。特に見る者に決定的な印象を持たせる「映像」で他民族を貶めることは、レイシヤル・ハラスメント（特定の人種や民族、国籍の人々に対する嫌がらせ）の極致であり、人間として決して許されるものではありません。

日本人はその名誉と誇りにかけて、この映画の製作に関わった人々に猛省を促すべきではないでしようか。

(注1) (注6) 崔碩榮氏web 「『映画『軍艦島』はフェイクである』を示唆するこれだけの証拠」より

第三部 狂気を帯びる韓国の反日感情

李承晩政権以来の強烈な反日教育によって、韓国の反日感情は自家中毒してしまいました。誰かが「日本はこんな酷いことをやつたのではないか」と「日本人の悪行」を思いつくと、「残酷な日本人ならやつたに違いない」と盛り上がり、やがてそれは事実として集団記憶の中に組込まれて一人歩きを始めるのです。映画「軍艦島」はその典型でしょう。

こうして「創作」された歴史をぶりかざして「日本は歴史を直視せよ」と韓国が日本に迫るたびに、これまで日本側は何ら検証もせずに謝罪してきました。このために韓国の人々は「自分たちは常に正しい」という過信に陥り、国際感覚に麻痺が生じたようです。

第三部では、反日感情が高まつた過程を振り返ると共に、今やカルト宗教のレベルに達した韓国の独善的反日活動の実態を明りかにします。

- (注2) 『軍艦島入門』黒沢永紀著（実業之日本社）
- (注3) 「端島（軍艦島）における聞き取り調査及び現地調査」後藤恵之輔、森俊雄、坂本道徳、小島隆行
- (注4) 『軍艦島 奇跡の産業遺産』黒沢永紀著（実業之日本社）
- (注5) 『正論』平成二九年九月号「世界遺産『軍艦島』を韓国映画の捏造から守ろう」杉田水脈氏より
- (注7) 平成二九年一二月四日付産経新聞「美しき勁き國へ 櫻井よしこ」より
- (注8) 『正論』平成二九年九月号「世界遺産『軍艦島』を韓国映画の捏造から守ろう」杉田水脈より
- (注9) 『SAPIO』平成二九年一〇月号「映画『軍艦島』は史上最悪のフェイクシネマ」より